

明日香くんのあどけなかつた顔と身体が、少しずつ少女から大人の女へと変わっている。その過程を垣間見るのは私だけの、楽しみの一つになっている。

美貌と知性を持った明日香くんには、早く妖気な女へ脱しようとする焦りを感じることもある。私と彼女とは中学入試の試験日で初めて顔を合わせた。私は年甲斐もなく、あどけない少女に妙にわくわくしていたのである。妻などにはそんなことは言えるわけがない。ロリコン趣味だと罵倒されるのがオチである。だが、私の明日香くんへの慕情は、少しずつ芽生えつつある。

明日香くんも私を意識しているのが分かるようになった。油断は大敵。好事魔多し。白昼の死角。少女への倒錯。私はそんなことを、とめどなく歩きながら考える。

私は明日香くんと視線をあわせると、彼女のなかに入っていくような、全てを許してもいいというような、雰囲気になってしまうのだ。軽はずみな男女の関係という意味ではない。素直な相手への想い。それだけである。初めて明日香くんを見たとき、私の気持ちの中では初恋のようなオアシスが、年甲斐もなく出来ていたのである。

それは明日香くんに対する私の身勝手な、陶醉であるには違いない。要するに私は少女を見初めてしまったのである。明日香くんもその時は、たしかそういう眼をしていた。あとで知ったことだが、明日香くんの初恋の相手が私だったのである。

日頃明日香くんとは、あまり話し合うこともなく、時折学校の行事のとき、私は明日香くんに会えるというだけで、心が弾んでいた。文化祭では、明日香くんの所属するマンドリン・ギター班をもう三年も聴いている。マンドリンの演奏もうまくなっていた。発表会前の編曲や曲選び・練習は大変らしい。妻と一緒に大講堂の席には座るが、私は明日香くんのことしか見えていない。妻に話しかけられても上の空である。

明日香くんとはいつもアイコンタクトで会話をする。最初のころはよく分からなかったが、近頃は目で分かるようになった。妻などそういうことは知る由もない。千鶴は器械体操班に所属している。妻は公開練習を見に行くといつて中座したのにも全く気付いていない。

軽く会釈をするだけなのに、私は明日香くと秘密の世界を、共有している錯覚に陥ることがある。そんなことは死んでも人に話すわけにはいかない。自分の事は自分で悩むしかないのだ。少女への淡い想い。世間的に言うと近頃私はかなり、アブナイおじさんになった様な気がする。私にも同じ年頃の娘、千鶴がいるというのに。

明日香くと千鶴はプロテスタントの同じ学校に通っている。だが、どういう訳か、彼女と千鶴は当初からあまり仲は良くないようである。